

# 後期江戸語における「ござります」と 「ございます」に関する一考察

福島 直恭

## 1. 本研究の目的

### 1-1. 問題の設定

後期江戸語の口頭言語を反映した資料の中には、ラ行4段活用動詞「ござる」の連用形に、助動詞「ます」が後接した場合、[ゴザリマス]の他に[ゴザイマス]という形も多くみられる<sup>註1</sup>。一般に4段活用動詞の連用形は、「ます」が後接する場合には非音便形が現れるはずであり、[ゴザリマス]というのはまさにその形である。ところが「ござる」+「ます」の場合は、[ゴザリ]ではなく[ゴザイ]という形態も「ます」に接続する形として頻繁に現れるのである。現代標準日本語では、この傾向はさらに拡大し、[ゴザリマス]という本来的な形が現れることがほぼなくて、いわば破格の形式[ゴザイマス]に統一されたといえる状態である。

松村(1998)では、江戸語の[ゴザイマス]の[ゴザイ]を音便形として扱っている。おそらく、カ行、ガ行4段動詞の連用形に「て」や「た(たり)」が接続するときに現れるイ音便形との共通性に着目したものだと思われる。しかし[ゴザイ]を音便形とみなすなら、なぜ他の4段活用動詞と違って「ます」に接続する場合にも音便形が現れるのか、現れるとしてそれがなぜ、ラ行4段動詞なのに[ゴザイ]という形なのかなどについて説明する必要があるはずであるが、松村(1998)をはじめとして、その点を問題にした先行研究は管見の限りみあたらない。

本稿のタイトルは「ござります」と「ございます」だけを掲げているが、後期江戸語資料をみると、「ござる」+「ます」の実現形式は[ゴザリマス][ゴザイマス]だけではないことがわかる。今回調査した資料の範囲内にも、例えば[ゴザリンス][ゴザライス][ゴザンス][オザンス][ザンス][ゴンス][ゴゼエマス][ゴゼエス][ゴゼンス]などいろいろな形が現れる。[ゴザンス][オザンス][ザンス]などはほぼ洒落本の遊女専用語といえるものであり、また、[ゴンス][ゴゼエス][ゴゼンス]などは出現頻度が高くない上に、現れる資料にも偏りがあり、使用者もかなり限定的である。しかし、[ゴゼエマス]という形は、2節でも述べるように、特に滑稽本には高い頻度で現れ、江戸の下層階級の話者にはよく使われている形である。本稿では、[ゴザリマス]と[ゴザ

イマス]の変遷を考察するにあたって、この[ゴゼエマス]という形式の存在にも注目して考えていく。

## 1-2. 「ございます類」について

江戸語において「ござる」+「ます」と同様に、[～リマス][～イマス]の両形が併存しているものは他にもある。例えば式亭三馬作の滑稽本『浮世風呂』では、[ゴザリマス][ゴザイマス]両形ともそれぞれかなりの数の用例が拾えるが、その他[ナサリマス]と[ナサイマス]、[クダサリマス]と[クダサイマス]、[オツシヤリマス]と[オツシヤイマス]も同様に両方の形が現れる。さらに『浮世風呂』では[イラツシヤイマス]や[サツシヤイマス]などもみられ、これらも([～リマス]の方はこの資料には現れないものの)[ゴザイマス]と同類で、[イラツシヤリマス]→[イラツシヤイマス]、[サツシヤリマス]→[サツシヤイマス]という変化の結果生まれたものと思われる。本稿では、このように[～リマス]という形式から[～イマス]が派生し、一時的にでも両形式が併存していたと思われる次のような「動詞+ます」の実現形式群を「ございます類」と呼ぶことにする。

——— ございます類 ———

ござる+ます    なさる+ます    下さる+ます    おつしやる+ ます    いらつしやる+ます    さつしやる+ます
---

[ゴザリマス][ゴザイマス]と同様、[～リマス]と[～イマス]という形の他に、[ナサイマス(nasaimasu)][クダサイマス(kudasaimasu)]の接続母音aiが長母音化することによって生まれた、[ナセエマス][クダセエマス]などのエ列長母音形式が存在するという点も「ございます類」に共通する特徴である。また、現代標準日本語においては、「なさる」+「ます」以下も、「ござる」+「ます」ほど統一が進んでいるとはいえないかもしれないが、やはり[～イマス]の形に収斂しつつあるといえそうである。

ございます類の[～イマス]という形は、[ゴザリマス][ナサリマス]など[～リマス]からできた形であることは間違いないであろう。まず[～リマス]という形だけが先に存在していて、それがその後の時代では[～リマス]と[～イマス]が併存するようになり、さらに現代標準日本語では「～イマス」の方だけになっている(あるいはなりつつある)のである。つまり、少なくとも江戸の一般庶民の言語においては、「ござる」+「ます」を例にとると、時代の経過とともに、

[ゴザリマス] 専用 → [ゴザリマス][ゴザイマス] 併用 → [ゴザイマス] 専用
---

というような変遷をたどっているものと考えられる。本稿では、[～リマス]から[～

イマス] が生まれ、後者が前者の地位を奪い取ったという一連の変化について、後期江戸語の口頭言語を比較的好く反映しているといわれる言語資料の調査をもとにして、まずその変化を確認し、さらにそういう変化に影響を与えた要因について、[ゴザリマス][ゴザイマス]に加えて[ゴゼエマス]という形にも注目して考えていく。

### 1-3. 先行研究

江戸語の詳細な記述的研究はすでにくつも存在していて、それらの中には[ゴザリマス]と[ゴザイマス]に言及したものもある。先に挙げた松村(1998)の他、例えば湯澤(1991)には、次のような説明がみられる。

「ござります」は「ございます」ともなる。「ござる」に「ます」が付いたものであるが、一語のように用いられる。「ござります」は「ございます」よりも丁寧で、改まった場合の語である。(p206)

一応、[ゴザリマス]と[ゴザイマス]を区別して、両者には丁寧さや改まり度の差があると述べているが、その後続く、補助動詞の場合の分類や用例の列举に際しては、基本的に両者を区別せずに扱っている。おおよそ従来の江戸語研究においての、本稿でいうところの「ございます類」に対する関心は、せいぜいがこの湯澤(1991)の記述程度のものであり、[ゴザリマス]の他に[ゴザイマス]という形が現れること自体にふれるところのない先行研究も多い<sup>註2</sup>。湯澤(1991)にしても、[ゴザリマス]と[ゴザイマス]の間には丁寧さや改まり度の違いがあると述べてはいるものの、それはこの両形式が併存していた時代に限っていえることなのか、それともまだ[ゴザイマス]がなかった時代の[ゴザリマス]と、その後の[ゴザリマス]がなくなった時代の[ゴザイマス]にも、同様の違いがあるといおうとしているのか、この記述だけからはその点が明らかではない。[ゴザリマス]と[ゴザイマス]のそのような違いに、それほど大きな関心を寄せていないことが、このような不明確な記述として現れているのだと思われる。[ゴザリマス]と[ゴザイマス]の違いに大きな関心を持っていないということは、当然ながら[ゴザリマス]しかなかったものが、その後の併存期間を経て、[ゴザイマス]だけが生き残ったという事実についても、そういう事実自体は認識しているとしても、そのような変化のプロセスを明らかにしようとか、そうなった理由とか条件を考えてみようなどという発想は伴わないということになるであろう。

このように、従来の江戸語研究では、[ゴザリマス]と[ゴザイマス]の変遷に関する問題はあまり興味を持たれていなかったといえる。ただそういう中であって、長崎(2005)では、このふたつの形の違いを軽視せずに、調査の段階から別扱いして、補助動詞[デゴザリマス]から[デゴザイマス]へと使用の中心が移行していく様子を描き出そうとしている。また、三原(2010)でも、[ゴザリマス]と[ゴザイマス]の用例をひとまとめにせず、両者の違いに言及するところがある。しかしこの三原(2010)は

[ゴザイマス] の出現数が少ない三笑亭可楽の咄本を資料としているため、[ゴザリマス] と [ゴザイマス] 違いに関しては中心的なテーマの1つとしては扱われていない。長崎(2005)にしても三原(2010)にしても、[ゴザリマス] と [ゴザイマス] の違いを明らかにすることだけを目的とした論文ではない。そのため、なぜ後発の [ゴザイマス] が残ったのかという言語変化の問題に正面から取り組んでいるわけでもない。長崎(2005)の場合は補助動詞だけを対象にしているという点でも本稿とは違う。また、本稿で重視する [ゴゼエマス] という形については、両論文ともにあまり積極的な位置づけはなされていない。

## 2. [ゴザリマス] [ゴザイマス] [ゴゼエマス] の使用状況

### 2-1. 調査対象とした文献

本稿で調査対象としたのは、いずれも後期江戸語の口頭言語を比較的よく反映しているといわれる資料で、具体的には以下に挙げる洒落本、滑稽本、人情本である。どの資料においても、それぞれの会話部分のみを調査対象とした<sup>注3</sup>。

〈洒落本〉

『遊子方言』1770年刊 田舎老人多田翁

『南江駅話』1770年刊 北左農山人

『俠者方言』1771年刊 未詳

『南閩雑話』1773年刊 夢中山人

『甲駅新話』1775年刊 太田南畝

『傾城買四十八手』1790年刊 山東京伝

『繁千話』1790年刊 山東京伝

『傾城買二筋道』1798年刊 梅暮里谷峨

〈滑稽本〉

『浮世風呂』1809～1813年刊 式亭三馬作

〈人情本〉

『春色梅児誉美』1832～33年刊 為永春水

『春色辰巳園』1933～35年刊 為永春水

次の2-2以降で、これらの調査結果について述べていく。

### 2-2. 調査結果

2-1で挙げた言語資料(会話部分)に現れた [ゴザリマス] [ゴザイマス] [ゴゼエマス] をはじめとした「ござる」+「ます」の実現諸形式の出現状況を、洒落本、滑稽本、人情本に分けて示すと次の〈表1〉のようになる。例えば「洒落本」の [ゴザリマス] の119

という数値は、「～ございます。」という終止形の他に「～ございまして」「～ございました」「～ございましょう」などの合計である。本動詞も補助動詞もここでは区別せずに示している。

〈表1〉「ござる」+「ます」の使用状況

	ゴザリマス	ゴザイマス	ゴゼエマス	その他
洒落本	119	0	0	ゴザリヤス (8) ゴザリンス (2) ゴザリイス (12) ゴザイス (2) ゴンス (9) ゴゼエス (9) ゴゼンス (35)
滑稽本	121	231	32	ゴザリヤス (1) ゴザンヤス (1) ゴザイヤス (3) ザイマス (3) ゴザイ (8) ゴッス (4) ゴゼエヤス (4) ゴゼエス (5)
人情本	6	23	1	ゴザイヤス (1)

まず、洒落本8作品では、本稿で注目する〔ゴザイマス〕と〔ゴゼエマス〕は出てこないが、それでも〔ゴザリマス〕以外にもいろいろな形が存在し、使用されていたことがわかる。また、洒落本の中には、〔ゴザンス〕〔オザンス〕〔ザンス〕〔オス〕〔ダンス〕などの形も現れた。ただしそれらは、使用者が遊女<sup>註4</sup>に限られていて、一般人の使用する語とはいえないので〈表1〉には加えられていない。さらに〈表1〉に載せられている諸形式であっても、それらを遊女が使用した場合は、その数は〈表1〉の数値には加えられていない。

今回調査対象とした8作品は、江戸の洒落本の成立時期に関する一般的な分類に従えば、『遊子方言』『南江駅話』『俠者方言』『南閨雑話』『甲駅新話』が前期、『傾城買四十八手』『繁千話』『傾城買二筋道』が中期の作とされるものである。しかし、少なくともこれら8作品に関しては、成立時期に関係なく、最も基本の形といえる〔ゴザリマス〕の使用が中心的であったということができよう。ただし、だからといって洒落本は〔ゴザイマス〕や〔ゴゼエマス〕が未だ存在しない段階の言語を反映しているということではできない。〈表1〉の「その他」の欄にみられる〔ゴゼエス (9例)〕や〔ゴゼンス (35例)〕は、〔ゴザリマス〕から直接生まれた形とは考えがたく、〔ゴゼエマス〕→〔ゴゼエス〕、〔ゴゼエマス〕→〔ゴゼンス〕という変化を想定する必要があるからである。

つまり [ゴゼエス] [ゴゼンス] があるということは、その前に [ゴゼエマス] の存在が想定され、さらに [ゴゼエマス] があるということは、その前に [ゴザイマス] の存在が想定されるということになるのである。

次に、滑稽本『浮世風呂』では、洒落本の調査結果とは違って、[ゴザイマス] や [ゴゼエマス] の使用がたくさんみられる。また、「その他」の欄にも [ゴザイマス] や [ゴゼエマス] からの変化形と考えられる形がたくさん含まれている。逆に〈表1〉の洒落本の「その他」の欄に多くみられた [ゴザリヤス] [ゴザリイス] [ゴザリンス] などの [ゴザリマス] からの変化形と思われる形式は [ゴザリヤス] が1例あるだけになっている。このように、「ござる」+「ます」の中心的な形式が [ゴザリマス] から [ゴザイマス] とか [ゴゼエマス] の方にシフトしている状況が見て取れる。ただし、中心的な形式が [ゴザリマス] から [ゴザイマス] とか [ゴゼエマス] の方にシフトしていると表現したからといって、それは例えば第1段階として [ゴザリマス] 中心の時代があり、その後第2段階として [ゴザイマス] 中心の時代となり、さらに第3段階として [ゴゼエマス] 中心の時代となるというような変遷を本稿の筆者が想定しているわけではない。本稿の筆者が想定している変遷というのは、例えば標準形式としての [ゴザリマス] 対非標準形式としての [ゴザイマス] という文体的な対立があったものが、その後 [ゴザリマス] 対 [ゴゼエマス] という対立に変化したとか、さらに [ゴザイマス] 対 [ゴゼエマス] という対立に変化したというような文体的な対立の図式の変化なのである。

人情本では、少なくとも女性話者の場合は [ゴザイマス] の使用が主で、この点で洒落本とは違い、滑稽本と同様の傾向を示すといえる。男性話者は滑稽本と違って [ゴゼエマス] より [ゴザイマス] の方が多く現れるが、全体の使用数が少ないのでこれだけでは確かなことはいえない。なお、今回調査した人情本には、〈表1〉に掲げた形式以外に、花魁の此糸や新造、禿などの使用した [オザンス] (4例)、[ザマス] (9例)、[ザイマス] (1例) があるが、洒落本と同様にそれらの人物の言語使用の数値は〈表1〉には含めていない。

以上、本節では洒落本、滑稽本、人情本それぞれに関して、[ゴザリマス] [ゴザイマス] [ゴゼエマス] 等の出現状況を見てきた。調査結果をもとにして [ゴザリマス] と [ゴザイマス] のふたつについてだけみれば、「ござる」+「ます」の実現形式としては [ゴザリマス] 中心から [ゴザイマス] 中心という方向での変化が起こったということができであろう。しかし、これだけなら先に言及した長崎 (2005) が補助動詞 [デゴザリマス] [デゴザイマス] について示した変化の方向性を裏付けるだけのものだし、現代語の状態を考えれば、詳細な調査を実施するまでもなく容易に想定できる結論ともいえる。本稿の筆者の価値観から言えば、[ゴザリマス] と [ゴザイマス] の問題は、単に両者の出現数の変化を示して、[ゴザイマス] の勢力拡張と [ゴザリマス] の勢力縮小の過程を確認するだけでは不足であり、1-2でも述べたように、いわば破格の形といえ



る [ゴザイマス] が、本来的な形といえる [ゴザリマス] を駆逐したのはなぜなのかという点を説明する必要があるのである。本稿の筆者の考えでは、そのためには、[ゴザリマス] と [ゴザイマス] の他に [ゴゼエマス] という形の存在を考慮する必要があるし、さらに「なさいます」とか「くださいます」などの「ございます」以外の「ございます類」の存在も考慮する必要があるのである。[ゴゼエマス] については、これまで [ゴザリマス] [ゴザイマス] とともにその出現状況をみてきた。「ございます類」の他の形式については、次の3節でとりあげることにする。

### 3. 他の「ございます類」の使用状況

前節では、「ござる」+「ます」の実現諸形態に関して、[ゴザリマス] [ゴザイマス] [ゴゼエマス] を中心として、それらの使用状況を概観してきた。次に本節では、「ござる」+「ます」以外の「ございます類」の使用状況について簡単にみていく。「ござる」+「ます」以外の「ございます類」の中で、調査対象とした洒落本、滑稽本、人情本の中に、[ゴザリマス] [ゴザイマス] [ゴゼエマス] と比較できるくらいの使用数がみられるのは [ナサリマス] [ナサイマス] [ナセエマス] である。それらの出現状況を〈表2〉としてまとめた。〈表1〉と同様、例えば「ナサリマセ」「ナサリマス」「ナサリマシテ」「ナサリマシタ」などをすべてまとめて [ナサリマス] としている。[ナサリマス] にしても [ナサイマス] にしても、その出現数の半数以上は「ナサリマセ(シ)」とか「ナサイマセ(シ)」という形での行為要求表現としての使用である。この点は次に述べる「下さる」+「ます」、「おっしゃる」+「ます」、「いらっしゃる」+「ます」なども同じで、本稿の中心的考察対象である「ござる」+「ます」だけが行為要求表現としての使用、つまり「ございませ」という形で「～にいろ」とか「～に來い」とか「～に行け」などという用法が非常に少なく、他の「ございます類」と対照的である。

ここで [ナサリマス] [ナサイマス] [ナセエマス] の出現数を挙げるのは「ござる」+「ます」と比較するためのものだが、「ます」の後接していない [ナサイ] [ナセエ] という形も合わせてそれらの用例数を示している。なぜなら [ナサイ] も [ナセエ] も [ナサイマセ] の存在を前提としなければあり得ない形だと考えたからである<sup>注5</sup>。

〈表2〉「なさい」および「なさい」+「ます」形式の出現数

	ナサリマス	ナサイマス	ナセエマス	ナサイ	ナセエ
洒落本	36	0	0	2	16
滑稽本	6	39	1	22	53
人情本	1	34	1	24	18

〈表2〉をみれば分かるように、洒落本では〔ナサリマス〕、滑稽本や人情本では〔ナサイマス〕が「なさる」+「ます」の中心的な実現形式だといえそうである。

「なさい」+「ます」以外は使用数が少ないので全体を〈表3〉としてまとめた。〈表3〉の中で、「Vっしやる+ます」とあるのは、例えば「さっしやる」「書かっしやる」のように、動詞に「っしやる」が付いた形だとか、「書かさっしやる」のように動詞+助動詞に「っしやる」が付いた形をまとめたものである。「いらっしやいます」「おっしやいます」もその一類と思われるが、ここでは単独で扱った。

〈表3〉 その他の「ございます類」

	くださる+ます	Vっしやる+ます	いらっしやる+ます	おっしやる+ます
洒落本	クダサリマス 2 クダサイ 3 クダセエ 1	Vツシヤイ 11 Vツセエ 6		
滑稽本	クダサリマス 5 クダサイマス 4	Vツシヤイマス 3	イラッシャイマス 5	オツシヤリマス 2 オツシヤイマス 4
人情本	クダサイマス 15		イラッシャイマス 3	

〔クダサイ〕〔クダセエ〕〔ツシヤイ〕〔ツセエ〕という「ます」が脱落した形式を除外して、〔マス〕が顕現している形だけについてみると、〔～エマス〕という例は現れず、〔～リマス〕か〔～イマス〕のいずれかであった。洒落本では〔～リマス〕が2例現れ〔～イマス〕はなし、滑稽本では〔～リマス〕が7例で〔～イマス〕が16例、人情本では〔～イマス〕だけが18例であった。これは〈表2〉から得られた、〔ナサリマス〕中心から〔ナサイマス〕中心へという変化と同一の方向性を示すデータだと考えられる。

〈表2〉と〈表3〉にまとめた、「ござる」+「ます」以外の「ございます類」の出現状況を見ると、2節で検討した「ござる」+「ます」とほぼ同様な傾向といえるであろう。つまり2-2-3で述べた、

〔ゴザリマス〕と〔ゴザイマス〕のふたつについてだけみれば、「ござる」+「ます」の実現形式としては〔ゴザリマス〕中心から〔ゴザイマス〕中心という方向での変化が起こったといえることができるであろう。

という解釈は、「ございます類」全体に拡張して〔～リマス〕と〔～イマス〕の変遷として解釈可能であるということである。逆にいえば、〔ゴザリマス〕と〔ゴザイマス〕の勢力交替のプロセスは、基本的に「ございます類」の〔～リマス〕と〔～イマス〕の勢力交替の一環として位置づけられるということでもある。また、〔ナセエマセ〕など〔～エマス〕のような、長母音形式に「ます」が後接した用例数は少ないが、「ます」が後接しない形をみると〔ナセエ〕〔クダセエ〕などの長母音形式の使用は洒落本、滑稽本、人情本を通して多くみられることが分かる。〔ナセエ〕や〔クダセエ〕は〔ナセ



エマセ]、[クダセエマセ] から変化した形だと考えられるので、洒落本に反映された言語においても[～エマス] (もちろん[～イマス] も) がまだ成立していなかったわけではないということである。この点も「ござる」+「ます」の場合と同様である。

#### 4. 非標準形式としての [ゴザイマス] と標準形式としての [ゴザイマス]

##### 4-1. [ゴザイマス] の成立に関する問題の整理

前節では、[ゴザリマス] [ゴザイマス] の変遷は、基本的に「ござる」+「ます」以外の「ございます類」の変遷の一環として位置づけられることを述べた。そのことを認識した上で、ここでは [ゴザイマス] という、後出の、そして破格の形式が、なぜ [ゴザリマス] という本来的な形式にとり代わるようになったのかという問題について考えていく。その際に、論点を次の2つに分けて、①、②の順に考察する。

①. [ゴザリマス] → [ゴザイマス] に限らず、「ございます類」の [～イマス] が、なぜ [～リマス] にとって代わるようになったのか。

②. 「ございます類」の中において、なぜ「ござる」+「ます」だけが他と違う変遷をたどったのか

①は [ゴザイマス] だけではなく、[ナサイマス] [クダサイマス] など他の形式も含めた「ございます類」全体の変化の解釈である。これに対して②というのは、「ござる」+「ます」という結合形式固有の問題で、[～ナサイ] とか [～クダサイ] と足並みをそろえて [～ゴザイ] という行為要求表現形式として定着することがなく、常に「ます」と共起する形としてしか残らなかったことに関する解釈である。①に関しては次の4-2で、「～イマス」を音便形と考える先行研究の見解についての問題点を検討し、さらに筆者自身の解釈を示す。そして②に関しては4-3で筆者の考えを述べる。

##### 4-2. [～リマス] → [～イマス] という変化についての説明

###### 4-2-1. [～イマス] を音便形とする解釈について

1-1でも述べたように、松村 (1998) は、この [ゴザイ] を [ゴザリ] の音便形と呼んでいる。現代標準日本語では、「ございます」の「ござる」は、必ず「ます」と共起し、この語が単独で用いられることはほぼない。つまり、本動詞、補助動詞いずれの場合でも「ございます」全体で1単位として働いているということである。江戸語ではそこまで徹底していないが、後期江戸語でも「ござる」と「ます」の共起例が多いことは確かである。小松 (1985) が主張するように、音便の機能を1単位化の形態面での表示とみるなら、[ゴザイマス] という形は、「ござる」と「ます」が1単位化していることを形態面で示しているものといえるので、[ゴザイ] を音便形と呼ぶことにも相応の妥当性が認められるであろう。さらに [ナサイマス] [下サイマス] [オッシャイマス] なども

同様に考えることが可能だと思う。しかし、[ゴザリマス]が[ゴザイマス]になったのは全体で1単位化したことを音便を起こすことによって表示するためであるという説明だけでは、この変化に関する十分な説明とはいえない。少なくとも次のa、bに対する説明が欠如しているからである。

a. 音便を起こすとして、それがどうして「～イ」という形で一致するのか。

b. 「ごぞいます類」だけが、なぜ1単位化を積極的に表示しようとするのか。

aに関して、[ゴザッマス]という形になるのは難しいとしても、例えば[ゴザンマス]とか[ナサンマス]という形が不可能だということはないし、[ゴザイマス]の方が[ゴザンマス]より自然だという根拠もないであろう。また、bに関してであるが、例えば「参る」「居（お）る」「仕る」「奉る」などのラ行活用で本動詞としても補助動詞としても働くような出現頻度の高い動詞が「ます」と共起する場合が実際に多くあるが、いかなる形の「音便形」も現れない。このように考えると、[ゴザリマス]や[ナサリマス]は[ゴザイマス][ナサイマス]になったのに、[マイリマス]や[ツカマツリマス]は[メインマス]とか[ツカマツイマス]などにならないことを、1単位化の表示機能という点だけで説明できるとは思えない。

#### 4-2-2. [ゴザリマス]と[ゴザイマス]の文体的な価値

[ゴザリマス]→[ゴザイマス]という変化は、1単位化の表示という側面を持つということは否定できないであろう。その場合[ゴザイマス]は[ゴザリマス]に対する音便形相当となり、この両形が併存している言語社会では[ゴザリマス]が標準形式、つまり権威に結びついた言語形式であり、[ゴザイマス]が非標準形式、つまり社会言語学で言うところの隠れた権威（covered prestige）に結びついた言語形式となるはずである。より具体的にいえば、[ゴザリマス]－[ゴザイマス]という対立のうち、音便形[ゴザイマス]を使用することによって、相対的に

- ・発話場面の改まり度が低いこと
- ・聞き手との仲間意識が強いこと、あるいは心理的な距離が近いこと
- ・話者自身の社会的権威が低いこと、あるいは反権威的であること

などという話し手の認識を表明する手段になっているということである。1-3で引用した湯澤（1990）では、「[ゴザリマス]は[ゴザイマス]より丁寧さや改まり度が高い」と述べていて、さらに長崎（2005）でも調査に基づいてそのことを確認しているが、それはこの標準形式[ゴザリマス]対非標準形式[ゴザイマス]という文体的対立がもたらした結果である。この変化に関して、こういう側面からの解釈と、両形式の文体的な位置づけを確認することは重要である。しかし、先に述べたように、それだけでは説明しきれない変化だということも同時に理解する必要がある。次に、この変化についてのもう一つの側面に関して議論していく。

#### 4-2-3. 接続母音形式としての [ゴザイマス]

[ゴザイマス]をはじめとする「ございます類」の [～イ (マス)] という形式は、すべてラ行4段活用動詞の連用形に「ます」が後接した場合に現れるもので、松村 (1998) にいわせれば「イ音便形」である。しかし、ラ行4段動詞のすべてがこのような「音便」を起こすのではなく、一部の動詞だけである。このような [～イ (マス)] という形をとるラ行4段動詞は、どれも「ます」に接続する連用形末尾が *-ari* (*gozari*) という形をしている。そして、そこに松村 (1998) のいう「イ音便」が起こると *-ari* の子音 *r* が脱落して *-ai* (*gozai*) という母音の連続が発生することになる。特に後期江戸語において、このような位置に *ai* という母音連続が来た場合、それが *e* の長母音となって、変異形を生み出すことは広く知られている。[ゴザイマス] であれば [ゴゼエマス]、[ナサイマス] であれば [ナセエマス] がそれに該当する。次の例文は、『浮世風呂』や『春色梅児誉美』に現れた [ゴゼエマス] [ナセエマス] の例である。

(2) おめへの今のお話では、雪女とおつしやつたではごぜへませんか／直兵衛 (浮世風呂)

(3) ご不自由でもすぐにお出なせへまし／蔭八 (春色梅児誉美)

このように「ございます類」のラ行4段動詞は、4-2-2で示したような、非音便形 [ゴザリマス] - 音便形 [ゴザイマス] という、文体的側面での変異形の対立と並んで、それとは別に、接続母音 *ai* 形式 [ゴザイマス] - 長母音 *e* 形式 [ゴゼエマス] という、もうひとつの文体的対立に巻き込まれる、あるいは参与することになったということになる。この後者の対立 ([ゴザイマス] 対 [ゴゼエマス]) は、

接続母音 *ai* を持つ言語形式 (標準形式) 対 *ai* が長母音化した *e* を持つ言語形式 (非標準形式)

として、後期江戸語の、特に一般庶民の使用する言語変種内において、いろいろな言語形式に広汎にみられた文体的対立のうちのひとつと位置づけられることになる。そして本稿の筆者の考えでは、[ゴザリマス] は、この「接続母音形式」対「長母音形式」という文体的対立に自身も巻き込まれるために、もっと積極的な言い方をすると、文体的対立の一翼を担うために [ゴザイマス] という形で1単位化を示すという道を選んだのである。1単位化を表示するために「イ音便」を起こしたら、結果として文体的対立に巻き込まれることになったというのではない。文体的対立に参与することが主で、1単位化を表示するという方がむしろ副次的である。[マイリマス] や [ツカマツリマス] が「音便」を起こさないのは、仮に起こしたとしてもこの文体的対立に関わることはできないから起こさないのである。[ゴザリマス] が他でもない「イ音便」を起こしたのは、それ以外の音便では1単位化の表示はできても、この文体的対立に参与できないからである。もちろん1単位化の表示が副次的だといっても、この変化に積極的な意味を少しも持たないということではない。もしそうなら連用形末尾が *-ari* (*gozari*) という形をしているラ行4段動詞は、「ます」を後接する場合にすべて [～イマス] になるはずなの

に、そうっていないからである。ラ行4段動詞のうち連用形末尾が-ariという形をしていて、「イ音便」を起こすとaiという母音連続を生じさせるものの中で、「ます」と共起度が高く1単位として働くことの多い動詞がすなわち「ございます類」の動詞だということである。

〔ゴザリマス〕が「イ音便」を起こすことによって成立した〔ゴザイマス〕は、同時に〔ゴゼエマス〕という非標準形式を生み出し、標準形式〔ゴザイマス〕対非標準形式〔ゴゼエマス〕という文体的対立を成立させて、当時の庶民の江戸ことばを特徴づける「接続母音形式」対「長母音形式」という文体的対立の図式に組み込まれていったのである。ここで本稿にとって重要なことは、非音便形〔ゴザリマス〕対音便形〔ゴザイマス〕という対立とは違って、こちらの文体的対立においては〔ゴザイマス〕が標準形式に位置づけられるという点である。〔ゴザリマス〕も〔ゴゼエマス〕もなくなった現代標準日本語において、「ござる」+「ます」の唯一の実現形式としての〔ゴザイマス〕は標準形式相当であり、その起点はこの時にあったのである。

4.1と4.2で述べてきたことをまとめると次のようになる。すなわち、〔ゴザイマス〕は、次の〈表4〉に示すように、〔ゴザリマス〕対〔ゴザイマス〕という対立の中においては、〔ゴザリマス〕を元にして生まれた音便形に相当する変異形として非標準的な価値を持つ存在であり、逆に〔ゴザイマス〕対〔ゴゼエマス〕という対立の中においては、〔ゴゼエマス〕という非標準的な長母音形式を生み出したai形式という点で、標準的な価値を持つ存在であったということになる。この点は〔ゴザイマス〕類はすべて同じである。

〈表4〉〔ゴザイマス〕の文体的価値

	非音便相当：音便相当	-ai形式：-e:形式
標準的価値	〔ゴザリマス 〔ゴザイマス	〔ゴザイマス 〔ゴゼエマス
非標準的価値		

〔ゴザリマス〕から〔ゴザイマス〕が生まれ、その〔ゴザイマス〕が〔ゴザリマス〕を駆逐して標準形式として生き残るためには、「標準的ai形式」対「非標準的e:形式」という対立に乗っかって、〔ゴゼエマス〕との対比から〔ゴザイマス〕の方に標準的な価値が付随するという条件が必要であったと考えられる。一般的に言えば、「丁寧」の助動詞である「ます」と結びついて全体で標準形式となる要素としては、音便形はあまりふさわしい変異形とはいえない。なぜなら、ここまで何度も述べているように、基本的に音便形式は非音便形式との対立において非標準的な存在だからである。今回取りあげた「ございます類」以外は、音便形と「ます」が結びつかないという事実は、それを表しているのかもしれない。しかし、「ございます類」の動詞だけは、音便形対非音便形という対立とは別の、後期江戸語で顕在化したもう一つの新たな、そして使用者達にとっ

ては非常に重要な文体的対立に支えられて、他のラ行4段動詞とは別行動をとることが可能になったといえるのであろう。逆にいえば、接続母音形式対長母音形式という広範囲の言語形式にわたる文体的対立は、少なくとも江戸庶民の言語生活においては、いかに彼らのアイデンティティにとって重要であったかということがよくわかる事象だということもできよう。

## 5. [ゴザイマス] の独自性

前節で展開した議論は、[ゴザリマス][ゴザイマス]を中心として述べてはいるが、全体として「ござる」+「ます」を含めてすべての「ございます類」の変遷に関する解釈であったといえる。しかし「ござる」+「ます」は、それ以外の「ございます類」とは一線を画す特徴を備えている。今回調査した後期江戸語の資料の中に、[ナサイマス][クダサイマス]など[ゴザイマス]以外の「ございます類」は、その「ます」が脱落した[～ナサイ][～クダサイ]という形での行為要求表現が多くみられるし、それは現代語でも同様である。それに対して[ゴザイマス]は[～ゴザイ]という形で現れることが稀であり、しかもその[～ゴザイ]は次の(4)(5)のように行為要求表現ではない。

(4) アイ老人でござい(『浮世風呂』)

(5) 田舎ものと江戸ものと当分でござい(『浮世風呂』)

そして現代標準日本語では、[～ゴザイ]という形で現れること自体が全くなくなっている。「ござる」+「ます」の特殊性は、このように「ます」が脱落した形だけにみられるわけではない。3節でも述べたように、そもそも「なさる」+「ます」、「くださる」+「ます」などの「ござる」+「ます」以外の「ございます類」は、[ナサイマセ(シ)][クダサイマセ(シ)]などの行為要求表現としての使用に偏っているのに対して、「ござる」+「ます」だけが行為要求表現としての使用、つまり[ゴザイマセ(シ)]という形で「～にいろ」とか「～に來い」とか「～に行け」などという用法が非常に少ないのである。

この点をより明確にするために、[ゴザリマス][ゴザイマス][ゴゼエマス]の使用例が最も多い『浮世風呂』の数値を〈表5〉として挙げてみる。

〈表5〉『浮世風呂』の[ゴザリマス][ゴザイマス][ゴゼエマス]

	ゴザリマス		ゴザイマス		ゴゼエマス	
	本動詞	補助動詞	本動詞	補助動詞	本動詞	補助動詞
男性	7	79	2	14	5	26
女性	8	27	24	191	0	1
計	15	106	26	205	5	27



本動詞「ござる」+「ます」の命令形が出てくれば、それは「居ろ・あれ」「行け」「来い」の尊敬表現という意味になるはずであり、補助動詞「～ござる」+「ます」の命令形が出てくれば、「～であれ・～で居ろ」の尊敬表現というような意味になるはずである。しかし実際には、[ゴザリマス][ゴザイマス][ゴゼエマス]のすべてについて、「本動詞」+「ませ」の用例も、「補助動詞」+「ませ」の用例もどちらも一例も拾うことができない。つまり[ゴザリマセ][ゴザイマセ][ゴゼエマセ]という例はひとつもないということである。これに対して『浮世風呂』の[ナサリマス][ナサイマス][ナセエマス]合計46例のうち、半分の23例は[ナサリマセ(シ)][ナサイマセ(シ)]の形の行為要求表現である。さらに『浮世風呂』には、「ませ」の脱落した[ナサイ][ナセエ]という形での行為要求表現が計75例現れる。しかし『浮世風呂』に現れる[ゴザイ]([ゴザイマス]の[マス]が脱落した形)8例のうち行為要求表現であるものはひとつもない。「くださる」+「ます」も「なさる」+「ます」と同じで、『浮世風呂』にあらわれる[クダサリマス][クダサイマス]計9例のうちの7例が行為要求表現である。そして残りの「～っしゃる」+「ます」、「おっしゃる」+「ます」、「いらっしゃる」+「ます」の合計数14例のうちの9例が行為要求表現である。このように「ございます類」のほとんどが行為要求表現としての使用に偏っている中で、「ござる」+「ます」だけが行為要求表現としての用例がみられないのである。[ナサイマス]や[ナセエマス]は、[マス]が命令形の形をとって行為要求表現形式として現れることが、元々その主要な用法だったので、そこから「ます」を脱落させて、言い換えれば「ます」の分の丁寧さを差し引いて[ナサイ][ナセエ]という形での行為要求表現形式が確立する素地が十分あった<sup>注6</sup>し、[クダサイマス][イラっしゃイマス]などもその点は同じであった。しかし「ござる」+「ます」だけは、元々行為要求表現としては使われない形式だったので、「ます」を脱落させて[ゴザイ]とか[ゴゼエ]などという行為要求表現形式が生まれることはなかったということである。

〈注〉

- 注1 江戸語資料には[ゴザリマス][ゴザイマス]などと並んで[ゴザリヤス][ゴザイヤス]という形もみられるが、本稿では[～マス]と[～ヤス]の違いは問題にせず、[～マス]で代表させた。
- 注2 ただし例えば近藤(1993)をはじめとするいわゆる「遊女語」を対象とした諸研究は、[ゴザリマス][ゴザイマス]はもちろん、それ以外のいろいろな派生形も含めて詳細に記述している。しかしそれらの研究の関心は特定の話者集団(遊女)の言語使用に限定されていて、本稿とはその点で研究目的が大きく異なる)
- 注3 洒落本はすべて「洒落本大成」(中央公論社)、『浮世風呂』は「日本古典文学全集」(小学館)、『春色梅児誉美』『春色辰巳園』は「日本古典文学大系」(岩波書店)の本文をテキストとして調査を行った。
- 注4 ここでは禿や遣り手も遊女に含めている。遊女屋、茶屋、船宿等の女将は一般の話者として扱う。
- 注5 『大辞林(第2版)』松村明編(三省堂)の「なさい」の項に、この「なさい」という形の成立に関して、動詞「なさる」の連用形の音便形「なさい」に助動詞「ます」の命令形「ませ(または「ま



し)の付いた「なさいませ(「なさいまし)」の省略形であるとの記述がある。また、それにあわせるなら、表1には「ゴザイ」という命令表現も入れるべきということになるが、5節でも述べるように「～ゴザイ」という形は命令表現としては現れない。

注6 本稿の筆者は、「なざる」+「ます」や「くださる」+「ます」などが「ナサイ」「ナセエ」「クダサイ」「クダセエ」などの形で行為要求表現形式として確立した事象に関して、福島(2016)で詳しく述べた。

(引用・言及した文献)

- 近藤豊勝(1993)『江戸遊女語論集』新典社  
長崎靖子(2006)「江戸語における『でございます』」『日本女子大学会誌』25  
福島直恭(2016)「行為要求表現「～なさい」の成立に関する一考察－日本語史記述における「視座」の確認－」『日本語史叙述の方法』大木一夫他編 ひつじ書房(印刷中)  
松村 明(1980)「江戸時代後期の国語」『国語学大辞典』東京堂出版  
松村 明(1998)『増補 江戸語東京語の研究』東京堂出版  
三原裕子(2010)「三笑亭可楽の作品における「ござる」について アクセント史資料研究会論集VI  
湯澤幸吉郎(1991)『増訂江戸言葉の研究』明治書院